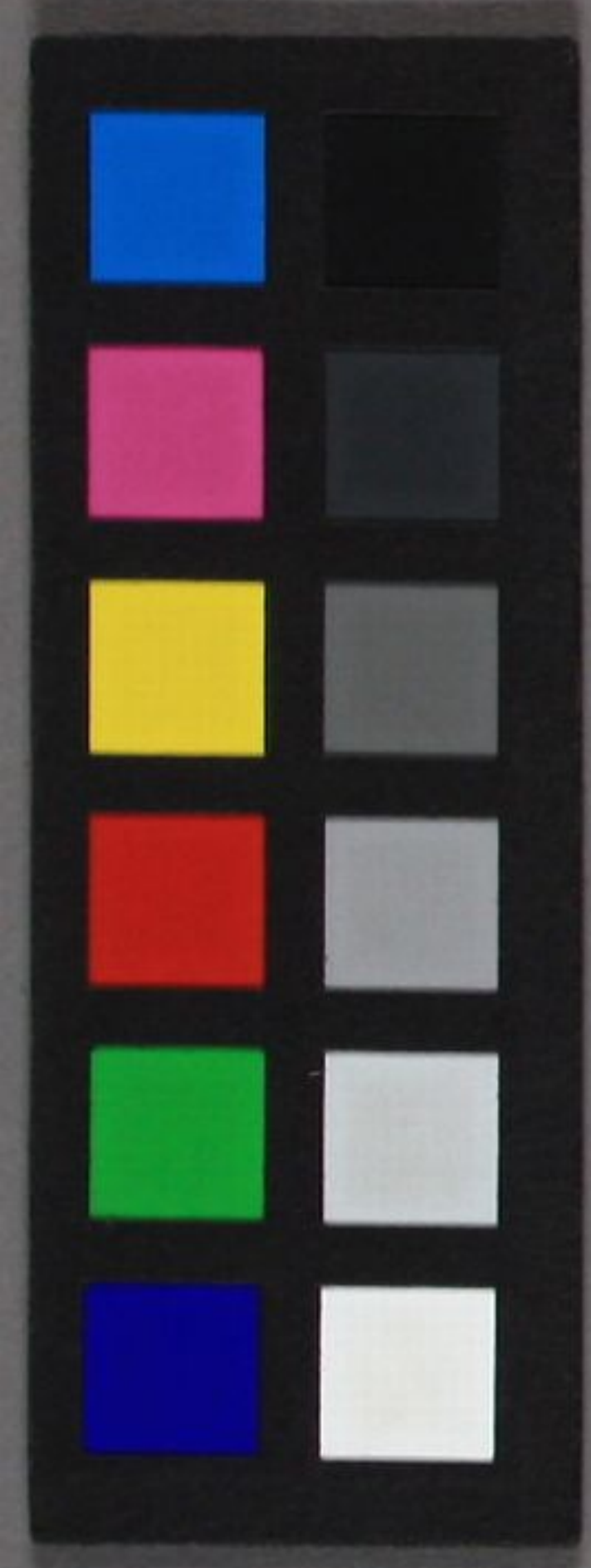


西川百子歌集

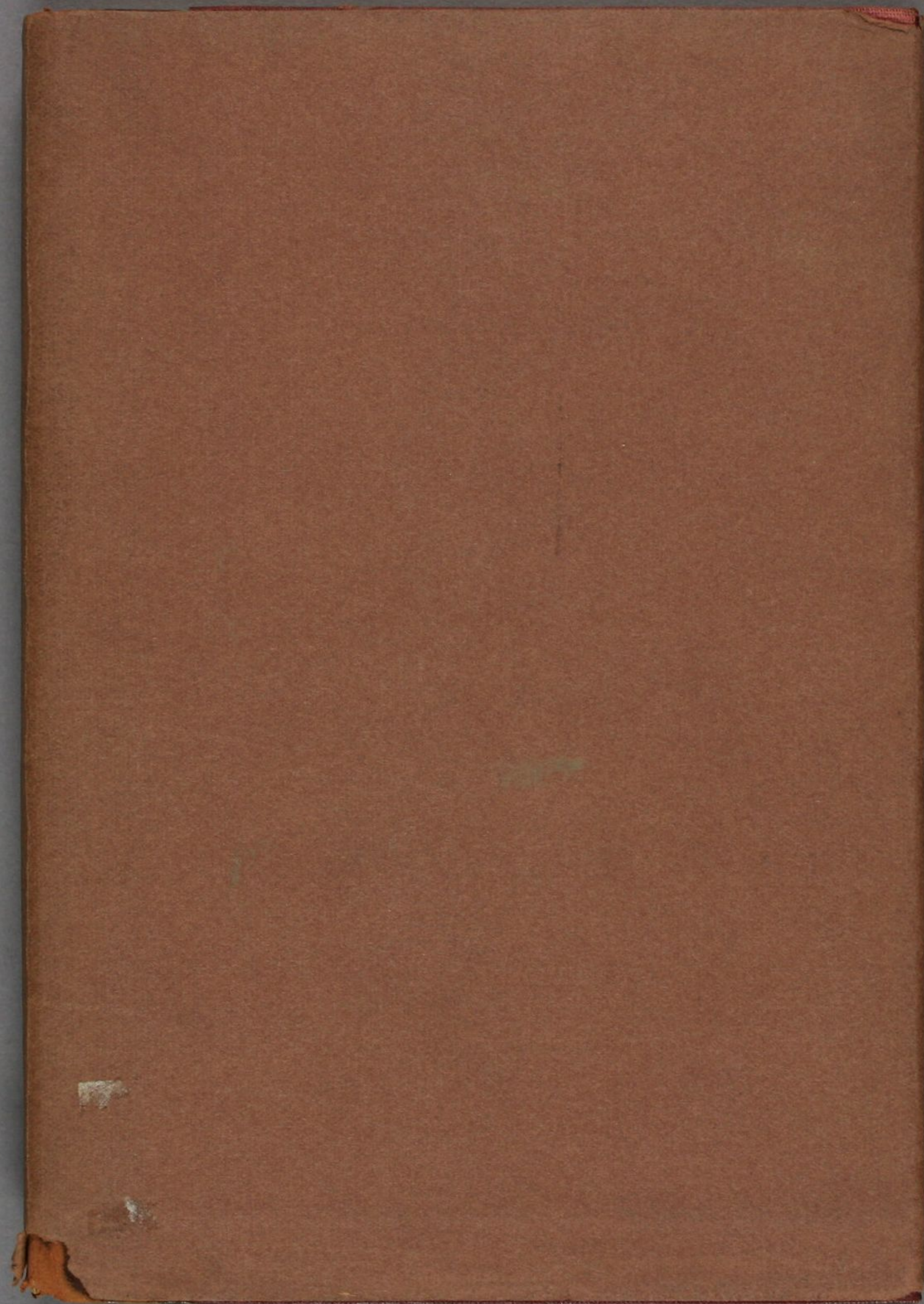
刀葉林地獄

त्रिगोकु तौरिन्



集原
刀葉林地獄

西川百子



西川百子歌集

刀葉林地獄

तोयोरित् त्रिगोडु



集歌子百川西
刀葉林地獄

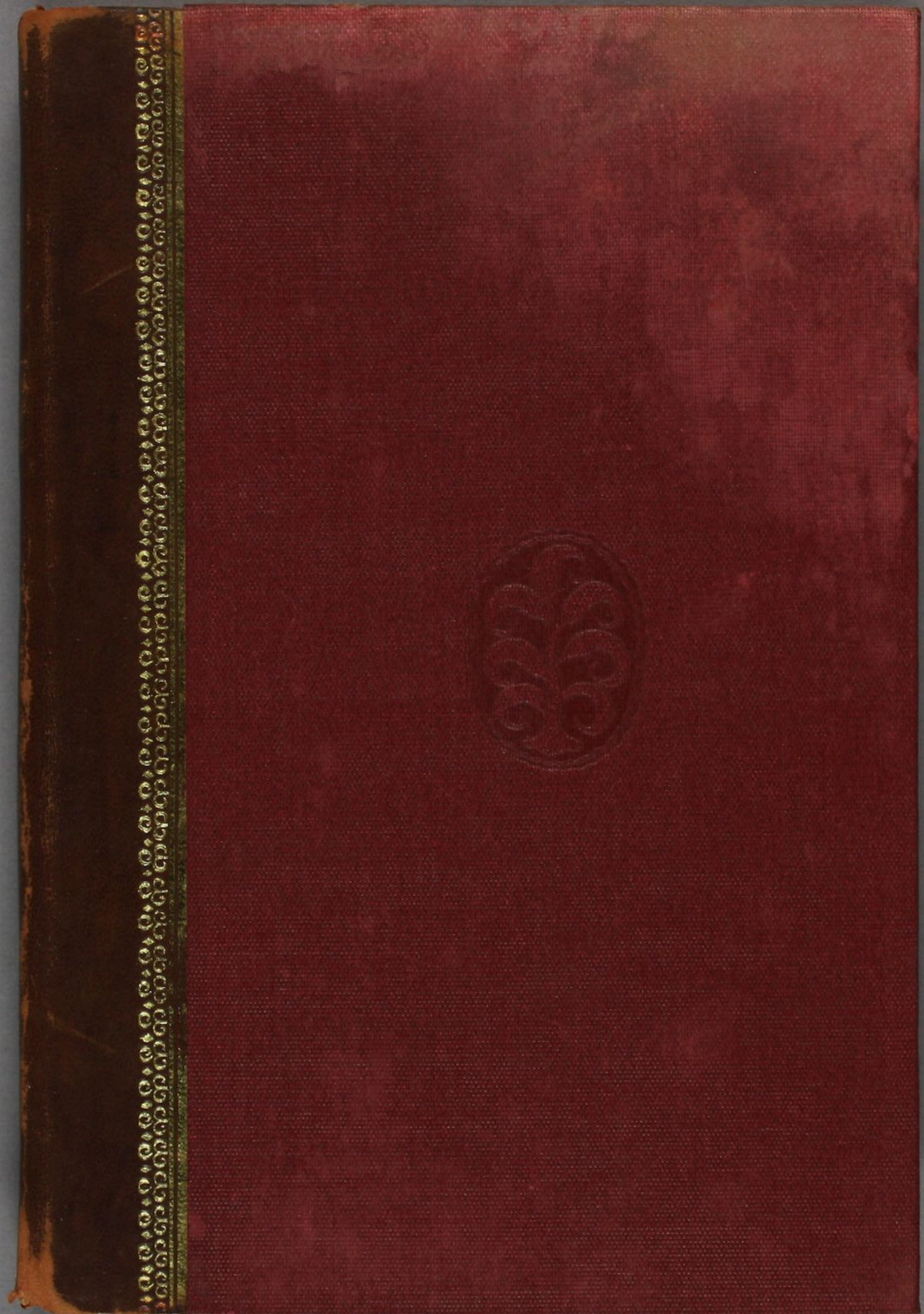
西川百子



तोरिस्त्रिगोक्षु

解刀集林地獄

西川百子



又復如是閻魔羅人取地獄人置刀葉
林刀葉甚多火燄熾炎而此罪人見彼
樹頭有好端正巖飮婦女如是見已極
生愛染如是婦女妙鬢莊嚴末香全身
塗香塗身如是身形第一巖飾身極柔
軟指爪纖長喫怡含笑以種種寶莊嚴
其身種種欲媚一切愚癡凡夫之人見
則牽心彼地獄人既見如是端正婦女
在樹上已生如是心是我人中本所見
者是我本時光所有者彼地獄人自業
所誑故如是見如是見已即上彼樹樹
葉如刀割其身肉既割肉已次割其筋
既割筋已次割其骨既割骨已次劈其
髓如是劈割一切處已乃得上樹欲近
婦女心轉專念自心所誑在彼樹上知
是受苦既上樹已見彼婦女復在於地
彼人見已焚彼婦女以欲媚眼上看彼
人美聲語喚先以甜語作如是言念因
緣我到此處汝今何故不來近我何不

刀葉林地獄

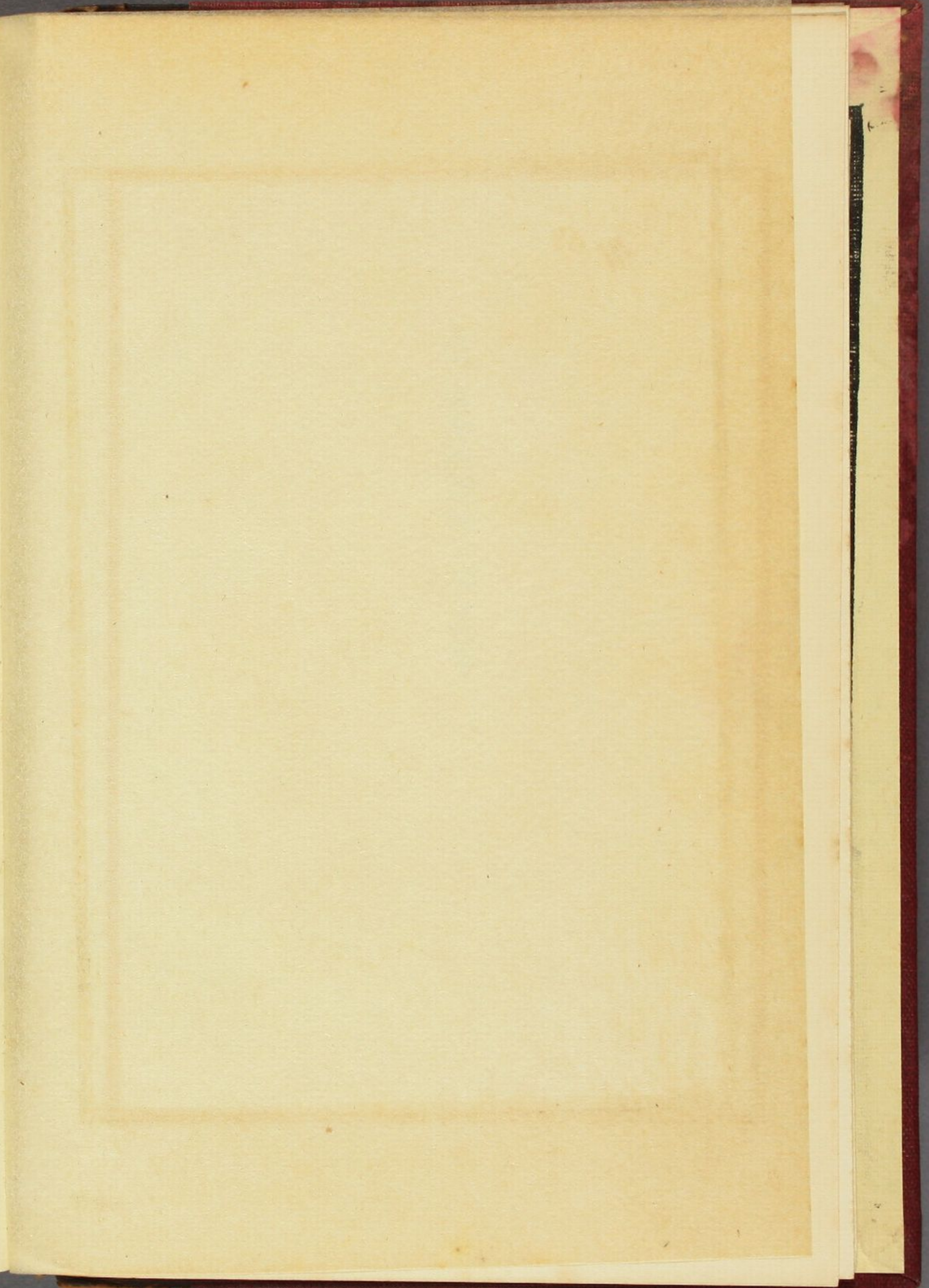
西川百子

刀葉林地獄

西川百子

八代参次郎様御夫妻に獻ず







自序

三年前の秋、私が京都の弘文堂書房から出した處女歌集「無産者」は、所謂治安妨害の理由のもとに發賣頒布を禁止せられた。敷島の道てふ三十一字詩が法の適用を受けたことは、私をして可なり意外な感じを起さしめ、同時に、私の思想に感情に、息苦しい一種の痛みを與へたが、その歌集に序せる如き、私自身の胸のうちに、絶

えず異つた二つの我の相剋しつゝある日常の
痛苦に比すれば、それはなほ忍び易いものであ
つた。さうして、その當時の印象も、日を経、月を
経るに従つて多少は薄らいだが、私の心内の争
鬭は、なほいまに小止みもない。依然として胸
裡二元の軋轢に惱まされて居る。

二つの我は、靈と肉と、けもの、我と神の我と
のやうに、截然相反せるものが互に我として對
立せるものであることもある。「無産者」の頃

の私にはこれが私の精神現象のすべてであり
又此のみが私の苦惱の全部である如く思はれ
て居た。しかし苦惱の體驗の重さなるにつれ
て、必ずしも斯様に本質的に分ち得る心そのも
のが、一方にあつて一の我たり、他方にまた別箇
の我をなし、互に鬭ぐやうな場合ばかりでなく、
多くは相異りし如く思ふこの二つの我が實は
本質的には相ひとしいものであるとする場合
にても、それが私の唯一實在たる心の中に、兩極

端の位置を占めて、その一つ一つに、別箇の我を
作ることによつて、相剋反撥せるものたるを感
ずるに到つた。

斯くして私は、この二つの我はそれ自身箇々
に私と同じき自己分烈の形象を有し、これが睽
離に累せらるゝ點と、加之、恒に私の意志の制御
をうけずして、却つて私を支配すべく相争へる
強き力たる點とに於いて、二つの我また畢竟ふ
たりの人であることを、つくづく思はざるを得

なくなつた。

ふたりの人は、斯様にいづれもその己の心の
うちに、愛と憎と、戀と恨との、烈しい葛藤に虐ま
れながら、ひとりか他を抱けば、他はふりかへり
て噬やぶり、やぶりは抱き、また抱かれむとす
る。愛は憎となり、憎は愛となり、戀より恨へ、恨
より戀へ、憎愛轉輾し眷戀止む期はない。あゝ
この時私はそのいづれに便るべきぞ。即ち執
念きふたりの力にひきずられて、其日其日を行

く惨ましき心のあところ、第二歌集刀葉林地獄の一卷である。

地獄は、苦しい、悲しい、惱ましい。しかも聖者の説く天上の樂園にもまさつて、現し身の地獄には離れ難い。刀葉林地獄の一卷、またこの苦惱と悲哀と懊惱とに寄せる、私の愛着の盡きせぬ記録である。

千九百二十一年十一月下旬大阪毎日新聞社京都支局にて作者、

例言

一、歌集刀葉林地獄に收むるところは歌集無産者上梓以後即ち大正八年冬より同十年秋までの私の重なる創作である。外に社會思想を詠へるものは他日編むべき歌集の爲に概ね之を筐底に遺すこととした。

一、歌集の爲めに序詩を寄せられた白蓮夫人、並に跋を賜はりし厨川薄田兩先生の御厚意を深謝する。夫人はこの年の十月九日生涯の運命を賭して伊藤家を去らむとする非常の時に廿數日間これが執筆に刻苦し東上の際約の如く私に送られた。序詩の結句には煩惱

の關ひ消えてこゝは自由と愛の天地とある。斯かる天地の一日も早く恵まれむことを私は夫人の爲に切に祈る。

一、装幀と挿畫とは中山泰輔君を勞し宮崎泰介今小路抱夢林田撫水海老阪春星の諸君に種々の御手数を煩はした。なほ出版に就いては面家莊佶氏の配慮をうけたことが多い、記して感謝の意を表する。

一、因に本歌集の校正は發行の日を急ぎし爲前後二回に止めた。誤謬の殘存するあらは版を重ねる日に訂す事とする。

目次

刀葉林
刀葉林……………一
秋海棠……………一九
虞美人草……………二四
桃割……………二九
山焔ゆ……………三五
京の街……………三七

唇	四
ゆく春	四五
梅日和	五六
牡丹咲く頃	五六
辻占	五七
三月月	五七
宿世	五八
落椿	五九
紙屋川	六〇
迎春譜	六一

東京に来て	九四
近江路	一〇〇
冷たき知慧	一一三
花供養	一二四
彼の女	一二七
北國の港	一二九
栗賣	一三六
蟲聽きに	一三〇
月の寧樂	一三六
男心	一四五

耀く水脈

耀く水脈	一〇
鳳仙花	一五
郊外	一六
挽歌	一三
柩の主	一六
初夏の日	一四
大比叡	一七

鏡餅	一〇
ますく	一五

刀葉林地獄序詩

白蓮

跋

厨川白村
薄田泣菫

自序及例言
裝幀及挿畫

中山泰輔

刀葉林地獄序詩

白蓮

人間界

われ 人間に生をうけぬ

きみ 人間に生をうけぬ

同じとき

同じところに

相見えぬ

一瞬のへだても

一尺のへだたりも

道の行きずりにさへ
見ずば 見ざりしものを
縁なくしては
さても 因縁の嬉しさよ
さても 因縁の悲しさよ
はかりがたき眞砂まきごの中の一粒は
果敢なき人間の小さき命なれども
げに全世界を擧げても

代へがたきは 人の心と命

我 君を見しとき
君 我を思ひき
陽も 月も
ゆく水の流れも
落ち来る花片も
御佛ごぶつのみ許ゆるしなればこそ

我世は君ある世ぞと思ひき
千年のいにしへ
千年の未來をつらぬく
人間の戀こそ
げに 嚴かなれ

花鳥の色音
天地の聖なるうた

吾は好んで惱みの色と歌とを見聞く
情欲の心臥せり居れば
惑星の影やごす湖しづかなり
夢も 現も 幻もなく
過去も 現世も 來世もなく
あるは唯 君と 我となりき

歡喜より生るゝ歎歎の涙地を露せば

枯れし木は芽を吹き出だし
ねぐらの鳥は目をさます
あゝ 自然は教ゆ
これぞ 萬物創成の始なり終なりと

地獄界

焔々ともゆる ほのほ
胸のほむらか 地獄の火熱

林の木の葉も そよげる草も
盡くこれ 刀葉林
焔はさかる
青に 紅に 紫に
人を思ふ心 火と燃えて
成就を祈る心 劍のごとし
樹上に 聲あり
正しく我名を呼ぶ

樹上こゑれの人は 我思ひびと
その顔は金色の如くにかゞやき
莊嚴なる姿は何にたとへむ
樹上こゑれの人はまた聲をなす
來よ 來よ とく來よ
思ひおもはるゝ縁なり 御許みゆるしなり
なぞ 我こゝろと伴ともならざるかと
苦惱の中の嬉しき姿よ

寄らむとすれば
さへぎる 木も草も 皆 乃なり
肉も 筋も 脊も劈かれ
身は破るゝに
樹上こゑれの人に向はむと心は狂ふ
我 樹上こゑれの人となりて

我 人を抱かむとすれば

空――

その 影も 形も

無――

あはれ 怖しき刀葉林獄！

おゝ あの聲！

我爾を思ふ因縁あり

人間の世のちぎりを忘れずば

何ぞ 直に來りて我を抱かざるやと

あゝ その聲！

今は樹頭になくて 地上にあり

望めば 刀葉復 我に逆らひ

肉も 筋も 骨も 身も破るゝに

愛染の心 ひし／＼とその人に迫る

地獄の鳥は 我眼を 啄み

刀葉は 我耳を 割く

身は怖ろしき呪ひの中に繋がれて

祈りの爲めの 結迦跣座さへ

許さじと 刀葉盡く我に逆らふ

愛欲の心は燃ゆる

無量百千萬歳の苦しみよ

戀の地獄！

戀の餓鬼！

戀の畜生！

天上界

こゝは天上の 花園なれば
諸の汚穢はあらず

恨み 憤怒 憎しみ

疑ひ 悩み

そは 人間と 地獄のけがれなり

愛の 微風は 柔らかに

花より花に 戯言いひて

吹かるゝ花片 笑みこぼるゝ

一人はいふ

「誇のつよい薄紫の花でさへ

目を上げ得ぬようにうつむくのは

赫灼たるそな様の光耀に

怖れてゐるかしをらしい」と

「愛の言葉と臥蓐が懇なら

凡てのものに情をかけませう」と

一人がいふ

佛の慈悲の永劫にして
月日は常はらに愛を育はぐみ
不滅いのちの生命
三世をどほして
因と果
應と報
あやまりなき輪廻りんねの掟おきて
極樂淨土は常住の春にして

不斷に降るよ
芬陀利華の花
煩惱たふしの鬨なげ消えて
こゝは自由と愛の天地あめつち

刀
葉
林

死^しねよともまた生^いきよともわれに強^いふ張^はの冷^れ
しき黒^{くろ}き腫^{はれ}に

夜の精のごとく美し泣き濡れし黒き瞳もそれ
の惱みも

うつくしき絲切り齒なり笑むごとにそれが優
しく我を誘ひき

いかにながくたづねたりけむ

そのひとは

こゝにありこゝにうれしげにゑみ

ゑみにひかれ

ゆけばきすすきすすつけば

きみのゑくぼのいやふかみかも

傷つきて惱めば君の唇の解けて優しき言の葉
や投ぐ

地獄、地獄、地獄、

地獄なればぞ在りし世の
俤いだき憚らす泣く

うつし世の二千年の苦惱をひと日に受けて君
に會はむかも 經曰、壽二千歳爲此地獄一日夜

身ひとつに受くる百千の苦惱はものゝ數かは
君とあふとき

在りし日のおんみを見まく戀しさに生けるわ
れぞと涙まづ言ふ

「なにすどてわれうまれこし」疑も

解けてあとなし

君を抱けば

唇に生命捧げてわれに來し子の追懷もかりそ
めならず

君おもへば愛より強く憎みより執拗きもの
首を擡ぐる

花咲けば曇日續きわが戀に重き不安の擡げ來
しかな

いらだたしその上戀し疑ふにあらねど君を思
ひ募れば

末かけて契りし君をこゝろにもあらで悲しき
疑に置く

疑はれそれを怒りて唇をかみて泣かねば會ひ
しともなし

疑うたがひを生うみさびしさを孕はらみきぬあゝ地ちの上うへの
いきものゝ戀こひ

傷いたましき宿業しゆくごうぞかし苦くるしみの増ませば戀慕れんぼのいや
募つひるさみ

唯ただひとり惱なやめる如ごとく言いひ募つひり悲かなしやあへば互たがひ
に責せむる

責せめられて責せめて互たがひに宥ゆるしあふ癖くせも募つひればか
なしきものを

油あぶらよりおもき妬ねたみが滲にじみきて疲つかれし戀こひのいやさ
らに焰もゆ

我わがよりも情薄なさけうすしと責せむるとき君きみの黙もくせばいか
につらからむ

戀こひは悲かなし打募うちつものりては逢あふ夜よさへ嶮けほしき眼めもて
君きみのもの言いふ

君きみを愛あしみあげし拳こぶしに自みづからの肉しんじをうちて痛いたみに
堪たふる

わが髪を撈りて君を呪ふまで戀の發作の募り
ゆくかな

われとわが髪を撈りて怒るまも悲しや君を宥
さむとする

われひとり想へるごとき寂しさを癒さまほし
くまた君に寄る

憤怒失するとすれば憐憫がそれにかはりて君
を戀はしむ

子を棄てよ妻を棄てよと責められしその追懐
も懐しからむ

君ゆるに命をもてる奴隷ぞと思へば下る涙な
るらし

齋せし彼女のかひなの体温の熱きもかなし諍
の後

醫されみはた傷つきみわれどわがあてなき戀
のかげを逐ふかな

會ふごとに互に責めて宥されていや募りゆく
戀にあるかな

泣きて會ひ怒りて別れかにかくに何を求めて
抱きあふ身ぞ

秋
海
棠

妻のほかに女をもてる者のみが知る悲しみぞ
救はれ難し

妻が死に彼の女が死にわれが死に斯く死に絶
えば安かりなむか

叱られて泣き居たりしをいつしかに妻の寢息
の安けかりけり

破れ靴の泥をいとはぬわが身にも戀のありけ
る春の追懐

初春なり

せめてひと日は家に居て

静に妻と語らはしめよ

年のうちにわれの笑顔をみることの幾度あら
む可憐しのひと

こぼれ咲の海棠の花の片翳り妻がもの乾す狭
き庭かな

庭の隅秋海棠のこぼれ咲妻はひねもすわが留
守をもる

妻もやがて待ちくたぶれて寝ねけむと思へば
さびし廊の夜の雨

虞美人草

待つ宵は衣桁にかけし羅の虞美人草のはなを
數ふべかりき

ひなげしの花は儚し夜の衣に染められてさへ
みな頸垂るゝ

移り香は夜のころもの彩に置くひなげしのご
と儚けれ

紅くわなるの扱しごき帯きを解ほどけば萩はぎ桔き梗ぎやうはらりと咲さけり夜よるの
ころもに

ものゝ香かや衣い桁かぎに垂たれし紅くわなるの扱しごき帯きほの見みゆゑや
、闇やみに馴なれて

濃こまやかに聞ねのころもの虞ひ美な人ひ草しの花はなより迫せまる君きみ
のうつり香か

香料かうれきは君きみの膚はだに暖あたたまり逢あひのしづまを濃こまやかに
する

たゞひとり灯ともしを消けして部屋へやぬちの物ものの香におりを戀こ
ふ夜よにてあれ

俤おもかげにたつは彼の夜よの羅うすものの胸むねに戦そよぎしひなげし
の花はな

桃もも
割わり

蠶飼かひこがふ出雲いづもの街まちの旅籠屋はたごやの處女むすめなりける戀歌うた
の前書まえがき

そのをりはまだ桃割を結ひきてふ君の懺悔の
艶めけるかな

桃割の髪の憎さよいつしかに我を誘ひて戀に
ゆかしむ

帶揚の枕に秘むる玉章にひとつ加へしはつは
るの朝

繪看板それを眺めて君を待つ年もありにき初
春のひとごみ

とりし御手のほの暖み、春の灯に背向ひになり
し桃割の君

桃割を銀杏返に結ひかへて問ひたまふかなそ
の後のこと

夜目にしるき木蓮のはな風に揺れせむすべも
なし君の溜息

いもうと君をし思ふいつしかに懺悔となり
し戀の心に

停留所降りゆきし子の桃割の彼君に似し春の
おぼろ夜

幾歳か経て別れしをおもひでは初て見ける桃
割の君

山 焰 ゆ

あゝ山焰ゆと泣きひとり泣下しぬ徒に待つ夜
のあけ方に

ほのあかく障子の棧に傳ひきぬ水にうつりし
山火事の焰

火
變心を憤るごと烈々と火焰渦巻く深夜の山の

京の街

京の街青葉しぬればいづこにか我を戀ふ子の
住むこゝちかな

街路樹うち繁りゆけば心切に人を戀ふなり誰
とわかねど

めじるしの紙を結べば枝にそひわが袂吹く初
夏のかせ

疇昔の夜に君を待たせし石垣も青み御苑の夏
は來にけり

濃き淡き御苑のみどり打續きひとり歩むに惜
しき路かな

ゆゑしらす人の戀こひしくなるものか河原かはら葎よもぎの青あを
ひまされば

戀こひぶみを投げしぼすとも濕うるほへり頬ほにこゝちよ
き初夏はつなつの雨あめ

唇くちびる

おのが手てに當あつれば呼吸いきの苦くるしかり唇くちびるひとつ
いづこに置おかむ

またしても悲しきことを繰返す身となりにけ
り夕ゆふの祈いのり禱

頬ほを寄よすれば熱あつき雫しずくは傳つたひきぬ、いづこより來
し悲かなしみの味あじ

われに絶たるひとりの手さへ握にぎり得えぬ掌てを合あせ
何なにを禱いのる心こころぞ

唇くちびるは唇くちびるを逐おひ筑つく紫しなる海うみの火ひのごと冷つめたさぞ
焰もゆ

血の滲むまでの親嘴を與へ得ぬ唇ならし紅梅
のはな

唇をおのが枕におしあてゝひとり泣かまし春
の夜の雨

ゆく春

あかしかねて忍べば淺き磨だにわりなやもの
をひた思はする

初春やむかしの人を戀ふとには定められしに
われあらねども

歌留多會あとの疲れと衣の香とそれに惹かる
若き愁と

戀心さこそふさはめ降るなべに土にし溶くる
春の淡雪

留木の香君と歩めば花よりも闇の戀しき春の
宵かな

いくたびかそれかと思ふ
梵音も途絶へて街の
春の夜は更く

うつし世の悲しき者よ
そは君の名なりいな
いな我名なりとも

つらかりし君のいつより
離れじと我に云はせ
て笑みそめにけむ

降るなべに蕾ふくらみ
逢ふごとに君媚びまさ
る春の夜の雨

相見れば胸より胸へ悲しみに似しうれしさの
暖に湧く

春ゆけば二重まぶたのほの曇り君の笑顔の惱
しきかな

許されし戀の後にはあめつちを君のみ胸のう
ちにしぞ置く

別れめといへば優しくうなづきて笑みしを君
のやがて泣きいづ

ゆく春や別るゝ際に涙含む悲しき癖のつける
君かな

袖あてゝ泣きけるまゝに八つ口をこぼれし衣
の紅のいろ

いつよりも烈しく泣きてありし夜を思へば戀
しいづち行きけむ

われを戀ひいかに忍びてありけむと憶ふも悲
し嫁ぎゆきて後

含み聲くみこゑその聲こゑの主ぬしのゆくへをもほの慰なぐさばする
白粉おしろいのはな

ゑくぼさへありしやなしやわかぬまで別わかれて
ひさになりし君きみかな

人妻ひとつまとなりきてふ君きみの噂うはささへ思出おもひでとなりて春はる
よいくたび

そのひとも今は優やさしき妻つまとなりて兒このほかの
事は忘わすれ果はてけむ

梅うめ
日ひ
和わ

爪つま先にこ小石いしをけ蹶げればぜつ絶壁べきをま轉まびお落ちおけりと遠とに
訝こすだ

梅うめ林はやし檫はやく林はやしにつ續づくみ路ち白しろくひ光かれりさん三月げのわかせ

このやま山路ぢ梅うめをたづねてこ來こしものこをこ心こいつしか
君きみにさ誘さはる

牡丹咲く頃

さりげなく我を戀ふ子をうちすてゝ死なせて
見たし牡丹咲く頃

女始て人を戀ふれば大空の青みの底ゆ雲湧く
らむか

地の上に戦ひをあたへ戀を與へ初夏の日の曇
りてやまず

茄子紺の金紗の單衣ほの透ける袷あし戀し初
夏のかせ

山を越え水をひたして夜のいろはふたりの部
屋を慕ひきにけり

ほどゝぎすふたりの命終るとも今宵に似たる
夜には泣けかし

罪深きわれかな君を泣かしめて心いさゝか明
るうなれり

京の水惱み募れば髪を解き髪をひたしてあり
し君かど

われもまた女なりせば沁々と語らまほしき夏の
夜の雨

白蓮夫人の歡迎會にて二首

辻占

夏の夜の辻占よりも儂かる戀をするかな京に
來つれば

舞姫は辻占をみて興がりぬ、君戀ふといひ戀は
るゝといひ

鳴川の河原葎に露置けばだらりの帯の重げな
るかな

鳴川や水瓜流のともし火のいくつ浮びて待人
の來む

夏の月心ゆるせしひとあらば逢ひにゆけかし
河原傳ひに

嬉し^{うれ}さは木^き屋^や町^{まち}の夜^よの雪^{ゆき}洞^{ほら}にこの夏^{なつ}瘦^やせの君^{きみ}
を^を見^みる^{こと}

瑠^る璃^り色^{いろ}に銀^{ぎん}絲^し置^おきたる舞^ま姫^{ひめ}のだらりの帯^{おび}をふ
く夏^{なつ}のかせ

三^み日^か月^{づき}

欄^{らん}干^{かん}のそれより低^ひく三^み日^か月^{づき}の光^{ひかり}冴^さえたりけり、
秋^{あき}の夕^{ゆふべ}

萩芒松はぎすくきまつの葉越はしに舞姫まひのだらりの帯おびを吹ふく秋あき
の風かぜ

こすもすの花はなをたづねて來こよといふ聲こゑ研だまする
山やまの路みちかな

宿世すぐせ

胸むねのうちに二ふたつの我われの争あそへば斯かく瘦やせてこそ
春はるを迎むかふれ

この胸の獣の心神の心いつ宥されて和みなむ
身ぞ

われとわが身を沁々と劬りし一刻もなき悲し
き宿世

少女ゆゑ人を憚かり世を恐れ泣けばやさしき
者ごやはいふ

戦慄す少女の値一反の大島よりもやすき國か
な

貧しければかうす釘を弄ぶ如く人手に渡れり、
少女

虐げに馴れつる果の身は悲し自をさへ責めて
止まざる

鏡こそ世にうれしけれ窶れては窶れしまゝの
我に親しむ

春の宵許せし親嘴はかねて知る我の悲劇の第
二幕目と

君思へばわが掌たなごころいつしかにうち合あされて涙なみだ
含くましさ

わが合あす掌たなごころ解ときさめざめと君は泣なくなりけり
許ゆるしたまへと

落おち
椿つばき

靴くつの音おと靴くつに踏ふまるゝ土つちの音おとしみじみ馴染なじむ早はや
春しゅんの雨あめ

落椿卓おちつばきつくろの上にうへぼつちりと紅くれないしける春はるの宵よるか
な

春はるの宵よるや、更よけてデザートコースにい入ればや
君きみに待まちたるゝ心こころ

落椿楊枝おちつばきやうじのさきに啄つきつゝ影かげの揺うくを樂たのしむ
食後しょくご

落椿おちつばきうち重かさりて泥どろに滲しみ腐くりゆくなりひさり
戀こふまに

起きも遣らであてなき人を戀ふものか四月の
朝の床の暖みに

少女みな相思ふ日にわれのみが洩れたる如き
春の悲しみ

紙屋川

紙屋川のたもとにわれを待つ梅よりもいや
美しの影

紙屋川梅にはあらで通ひこし影をしぞ思ふ春
のおぼろ夜

紙屋川梅にそひこし幾まがり流のするの春の
夜の街

姉よりもなつかし妹より愛し銀杏返しの鬢の
膨らみ

酌に起つ銀杏返しぞ君に似るこの燕席の憎く
からぬかな

大一座亂酒のなかに撥とりし縞の御召の君を
忘れず

絃歌湧くたゞなかにゐてわが心しめやかに君
を思ふめでたさ

相見ては錦の帯を解きすてむ我も灯も春の夜
は生く

戀しさに得堪へぬ宵は口紅を濃くしてわれを
待つといふひと

いさゝかの白粉の香も朝風呂の湯氣にこもり
て春の雨降る

君が文寸に積れば梅櫻打重りて咲くこゝちす
も

しつとりとわが唇に齎せしその冷さの戀し黒
髪

君を待つ癖はいつよりつきそめし柳によるも
戀しければぞ

戀しさを戀ひても逢へぬ悲しさをひとつびと
つが語るぞかし春の灯

逢ふときを憚るまでにたゞひとり物を思ふに
馴れし我かな

逢ひたさの身の置きどころ自働車の響に夢の
覺めし春の夜

都の灯みないきいきと歡びに耀きみてる君に
逢ふ夜

それをすら妬しとぞ思ふ相會はぬ前のおん身
にありし艶話も

その人にも斯ほど優しくありしやと問ふて泣
かせていかにすべけむ

迎春譜

初日出年の始めの願ぎごとはおん手をとりて
かねていふこと

生命かけて、君をし得たる緊張に慄ひたつかな
春のあめつち

戀しきに堪へ貧しさをうち凌ぎ四たび迎へし
春の誇りよ

かつ懺悔し、かつ禱りて此のあら玉の年の始め
の君をこそ思へ

わが盡すこと尙足らず逢ふごとに慰められて
斯も得云はず

逢はであれば春をすべての悲しみの母とし思
ふ鶯の音も

いつまでも貧しさに置く君思ひ涙ぐましき松
の内かな

貧しければ君戀ふことも惨ましき罪のひとつ
に歎かるゝかな

生命かけて
いかに眞剣に戀へるかを
試みむぞ嬉しき迫害

東京とうきやうに來きて

春はるの夜よの夢ゆめ覺さめにけり驛えき夫ふら等らが靜しづ岡おかと呼よぶ聲こゑ
を嬉うれしみ

窓まど越こしに泌しみ々しみ見みつれ靜しづ岡おかの春はるの夜よくだちの街まち
の灯ひのいろ

麥むぎ青あをく花はなどころどころわが汽き車しゃは函はこ嶺ねにかゝ
り日ひの麗うらら照てる

自働車も電車の音も華やかに感激をもて迎ふ
る夕

人はみな斯く働けり跪つきて大東京の雑音を
きく

二十四時雑音止まぬ街にきてわが戀心置くと
ころなし

夕ざればわが旅心なにを戀ふ銀座の燭日本橋
の灯

柳の街櫻の街をうち過ぎて黄昏のいろを懐し
むなる

春宵の銀座通りに佇めど君に似たるを待つと
しもあらず

丸善の陳列棚に無産者を見つれ心はうすら寂
しき

春の路白き埃もあてびどの裳にたてる懐しさ
なれ

近江路

いや深き都の春の朝霧に君を殘せる鹿島立ち
かも

山に來て雪に裂かれし木の膚をしみじみ濡ら
す早春の雨

君戀し寺の菫にひよつこりと淡雪を見る早春
の旅

さかりゆけば再び御手をとることも許されぬ
如き悲しみの湧く

云ひ送る人傳てさへも憚りて悲しや旅に君を
思へる

棄てじてふ君の誓ひも寂しさのよすがとなり
ぬ久に逢はねば

逢ひたさを抑ふるゆるの悲しみと告げまく君
をいや戀ふぞかし

別れ來し後のひと夜の悲しさを誰に告げまし
近江路の旅

別れ來し悔をぞ思へ比良の雪伊吹の雪の遠に
光れる

旅の夜はねむりをなさず傍らに君のあるごと
手焙りに寄り

物も言はで背をむけしまゝ寝しこと理なや旅
の夜に思ひいづ

酒も飲まず疲れしまゝに寝ねもせで旅は一途
に君を戀はしむ

ひよつとしたら御身も覺めてわが事を思ひ玉
はむと心和めり

沸るほど沸ればいつか鐵瓶の音もせずなれり
旅の深更に

君思ひいねで明せし近江路の旅もやがては戀
しうならむ

汽笛鳴るその一瞬も君のこと忘れずといふ走り書かな

彦根驛すぎてがらりと空けばあち歩きこち歩き暗き山の影見る

窓硝子暗きがましてわが顔のくつきり浮ぶ人なき夜汽車

近江路や窓の外なる灯の美しければ君をしぞ思ふ

三日月や宿をもどらで君思ひ町盡くるまで歩
みてあらむ

宿もどらでさまよひ行けば水口の夜の街うれ
し酒造る唄

三日月の光うち慄ひわかうごの唄冴えたり酒
藏のうちに

戀に死なぬおのが生命を酒造る夜更の唄に悲
しみにけり

冷たき智慧

凝として戀ふれば悲し君のため一心に働き僅
に生くる

心頻りに寂しさに堪えず火事でもあれかしと
思ふ秋の夜

われひとり戀ひなば足らむとばかりの冷たき
智慧に慰めらるゝ

花はな 供く 養やう

花はな 供く 養やう わが 亡な き ひと も 艶あざ やか に 聽き きた まふ べ
き 晝ひる の 鐘かね かな

雲う 珠ず ざく ら 鞍くら 馬ま は うれ し 散ち る 時とき も 咲さ く と き も
山やま に 晝ひる の 鐘かね 鳴な る

山やま に き て 君きみ お も ひ 杉すぎ の 樹こ 立たち 越こ 沓はら かに 京みやう の 灯とも を
ぞ 見み る

棄^すてられしにあらすもとより棄^すてしにはあら
ねご寂^{さび}し悲^{かな}し逢^あはぬ目^め

花^{はな}咲^きけば花^{はな}に、ましてや雨^{あめ}となれば夜^よすがら君^{きみ}
を戀^こふ山^{やま}の宿^{やど}

彼^かの女^{をんな}

生命^{いのち}かけて慕^{した}へる君^{きみ}をよそに置^おきて心^{こころ}あてな
き人^{ひと}に憧^{あこが}る

頬ほに刻きむ疵きずのやうなる磨まきさへまたなく戀こし君きみ
のもてれば

彼かのをんな醜みにくきものがいづこにか打働うちはたらきて離はな
れ難がたかり

北ほつ國こくの港みなと

草くさ繁しげる城趾じやうしの石いしも馴染なじみあり踏ふみしめてなほ高たか
きに登のぼる

鬼蘇濃く咲きいで、草そよぐ城趾の山の晝深
みかも

松原の深みわくれば波の音はいつか聞えず月
草の咲く

波うち際君とわれとの足あとに滲みては溜る
夏の朝潮

振返り見し黒き眼の輝きを思ひ出づれば濤の
音のする

月あかり露西亞通ひの船かゝる波止場にふた
り彷徨ひしかな

露西亞に行く船の汽笛のぼうくと碇するな
り夜の裏山

小止みなく夜の雲断ぎれ燈臺のひかりに走り
海の鳴り出づ

ほのぐらき敦賀の街の廊の灯も身につまされ
て哀れがるかな

廊は悲しごと、にも君に似しありてわれに等し
き惱さすやと

北國の港の宿の宿帳にせめては妻とかきて
る

夜更けて隣の室に來し客を憚りてふたり物を
云はざり

逢へばいつか悲しきことを云ひ交し寝るふた
りぞ旅に出で、も

栗 賣

雨いさゝか灯し頃の栗賣の聲より廊の秋たち
にけり

焼栗の賣聲かよひ雨すこしそひて廊の月あか
りかな

丹波栗廊にいれば宵々に焼かれて白き掌に載
る

逢はぬ夜はそれさへ寂し秋雨の廊のまちに栗
焼くかをり

涙脆くなりし君かな栗賣の流にさへも濕める

枕紙

ひきどめて我を歸さず栗賣の流の遠き廊のも
のゝ音

栗賣が街を流して來る宵の書齋の冷のうすら
悲しみ

蟲聽ききに

蟲聽きむしきに廓くわくをふたりぬけてきぬや、更よけそめ
し月代つきしろの野のに

月つきしろの野のにたふすにたふすみて君きみの肩かたわが肩かたひたとよせ
て蟲むしきく

おもふこと互たがひにそれをなつかしみしみ泌々しみ蟲むしの音ね
をさくぞかし

月さやかに稻の垂穂の揺れもせでほのかなり
けり家の灯

逢ひそめしきそのなさけのよみがへりはてし
もしらぬ蟲の聲かな

そこになけばこゝにもなきて夜もすがらしげ
みゆくなり庭の蟲の音

夢にだに逢はまほしものを蟲の音よその玉ゆ
らも君をよべかし

御手をとることさへ人に憚りて覺めしが悲し
蟲なきしさる

たまたまに逢ひみしものをいつの夜の夢より
もいや夢くぞ覺む

ゆくりなく逢ひみし夢のさめくれば部屋一ぱ
いに月がさしてゐる

蟲の音もほのかなりけり塵塚のひくき烟の這
ふ草のうち

月の寧樂

蟲むしきゝに遙々はるばる來つれ春日野かすがのに夜の雲湧くもわきて悲かな
しかりけり

ふたりまた春日野かすがのの原露はらつゆわけて泣なきにゆかま
し人ひとを憚はにかり

おもぐるしき胸むねの惱なやみの通かよへばか鐘樓かねろうの闇やみゆ
鐘かねひゞきいづ

あゝ鐘鳴る、ひしとふたりが抱きあひ泣くべか
りけりその音のなかに

一語より一語おんみを責むるまで情迫りぬ、月
よ曇れかし

君悲しわが語ることもみな悲しこの寧樂の夜の
月やいはする

えもゆかで石階のもとの燈籠をめぐりて去れ
り、月の二月堂

二月堂ふたつきだうきざはしのはての樹きのうれに回廊わだきりうか
び水みづの音ねきこゆ

別わかれ談はなしふたりの唇くちびるをいつ洩もれし仰あやげば月つきに暈かき
置おく夜よなり

とるがまゝにとらせし君きみの手ての冷ひやも悲かなしかり
けり別わかれゆく前まえ

月つきに光あかりる石いしは冷ひやたしわが膝ひざのその上うへに君きみを慰なぐさ
はせにける

月つきさせば惱なやましきまで物ものみな影かげ美うつくしき寧な樂ら
の夜よの街まち

足音あしおとに鹿しかはおごろきそのおとに君きみはもわれに
縫ぬる月つきの夜よ

一い二に間けんふたりの影かげにおごろきてたちしを鹿しかの
慕したひよる月つきに

とつかはと鹿しかの驚おどろきたちしあとの樹この間ま漏もる
月つきぞしづもり冴さやけし

楚音にさめしや親嘴におごろきてたちしや鹿
の月に走る影

寧樂にきて月にふたりは死ぬといふこと嬉し
くも云ひいでしかな

男
心

ともすれば君の彼方に眞實の君ある如き寂し
さの湧く

逢ふに馴れ君の色香の衰へをいつしか思ふ智
慧の悲しみ

逢ふに泣き逢はぬに傷み疑はれ責められて君
を去りゆく心

な恨みそ別るゝことも戀ふ君を安かれと思ふ
男心ぞ

別るゝ日ふたり互に跪き掌を合せしづかに去
らしめ

耀
く
水
脈

大正十年の初秋僚友十二人ごともに丹波綾部に遊び暗夜の由良
川に舟を浮ぶその時のうた

あなかしこ我れの流せし裸火にさんらんと水
脈の耀き揺る、

板いたの上うへのたゞ一本いっぴんの蠟燭ろうそくの焰ほのほに光ひかる秋あきの夜よの
水みづ

水みづに流ながすわがともしびの消きえんとし消きえすけ
りこゝろ歡よろこびに満みつ

みつむればうつくしきことかぎりなしきみの
ひとみとみづのうへのひ

ゆくへしらず大河おほかほの闇やみにうかぶ火ひをいつしん
にみつめ涙なみだながるゝ

酔ひしれて君の流せる灯のひかりの尾ひく秋
の夜の水

秋の夜の由良の流れに灯を浮べておもふ別れ
來しひとを

鳳
仙
花

鳳仙花紅と白とのこぼれちる取止めなさも懐
かしの家

泣言をきかせんと來しを友の家いへに友ともはもあら
ず鳳仙花ほうせんくわちる

わが颯かぜの吹きよせられて風かぜいつか雨あめとなり
し夏の有明ありあけ

君が家の颯かぜのつりての紅くれなゐの葉越はこしに透すきて明あけ
そめにけり

短夜みじかよや咲さきの重おもりに手洗てあらひの水みづに浸ひたれるあぢ
さるの花はな

乳色の皿を染めたる一握の菜の淺漬の青くさ
き宵

煮えあがりまた煮えあがる鍋の汁の白き線み
て心安けし

麥酒冷え鍋の小芋も健かに煮えあがりたり夕
刊の來る

貧を凌ぎ女を得るは戦ひの第一線に立つ如き
かな

郊外

二反ほど蓮池のありて
灰紅く花咲き満てり
晝の野の中

ひた走る電車の窓ゆわが膝に吹きつけられし
野の蜻蛉かな

蜻蛉ひとつ吹きいれられてつと出でし電車の
窓の青き野と空

吹かれ寄りし膝の蜻蛉の翹光るこれの生命も
愛しかりけり

晝深み稻田のするに一本の煙突の烟もくもく
とたつ

雲の峰いくつ崩れて煤煙のはてをも知らず大
阪の夕

ひとところ家の灯はかたまりてうち燦めけり
闇の野の中

挽歌

高山義三氏の愛兒の小松谷の邸に生るゝや朋友相會してカー
ル、マルクスの肖像を小さき金のめたるこし贈らむ事を約す。
後一歳を経ず、鑄造漸く成ればその兒世に亡し埋葬の日泣い
てこれを柩前に供へ即ち挽歌を副ふ

戦はで逝く安けさをこゝに見る臨終の笑の尊
かりけり

労働歌唄へば
いつもすやすやと寝る兒なりしと
満座みな泣く

しづかに

泣かんとし家を出でたりけり
小松谷の夏の月の夜

花を入れ風船をいれ人形をいれたる如しちさ
き柩よ

愛し兒にカール、マルクスの肖像の金のめたる
を今か贈らむ

愛し兒の短かき生命おもふときわが戦は烈し
からむぞ

柩こしの主ぬし

薄倅の友森正覺君逝く。享年僅に二十四。彼れ本社（大阪毎日）廣島通信部に助手とし去四月舉げられて編輯局見習となり京都支局に勤務する事前後一箇月偶略血して肺を病めるを知り社を退きて大學病院に入りしも藥石効なく本月十二日養を易ふ。十三日支局同人遺骸を鳥邊山に送りて茶毘に附す。

われその夜家に歸り轉た故人が數奇の命を憶ひて終宵眠をな
こす

——大正九、九、一三——

二十四の命いのちを京きやうに棄すてに來こしこの若人わかうしも友ともな
りしかな

柩ひつぎの主臨終ぬしいまはの際きはも死ぬしといふ事ことをし知らず誰たれ
も教をしへず

肺はいを疾やめば恐おそしきものに觸さるやうに泌しみ々と慰なぐさ
めもせざりしこと

會あふ度たびに熱あつさへひかば起おきてみむ働はたらきてみむ
と云いひしが口癖くちぐせ

いづこより斯かくも冷つめたき風かぜや吹かく解剖室かいぼうしつの初はつ
秋あきの午後ごご

ほろほろに壊れし肺をまのあたり見たりし日
なり夜なりいも寝ず

在りし日は君を思はず君逝くとき、ても泣か
ぬ我をこそ呪へ

われもまた斯がては來べき日のありと黙して
迎る鳥邊山の路

世の幸の薄きわれらが行く道を静かにこゝに
見出でしこゝち

君の死を悼むといはずぼつねんと柩の後に隨
はしめよ

幸なくて逝きし君には弔の日の晴れたるをせ
めてうれしむ

逝ける者逝けるを送る者もみなあはれ貧しう
て睦まじいぞ

「金持のなき世で會はめ」

此一語

在天の靈來り享けよかし

初夏の日

河上も山川もみな瘦せてあり、われまた瘦せて
夏を迎ふる

軍服で丸刈である友をみて握手するより前に
微笑む

最後まで彼勇敢に戦へり、むべ縋帯の赤化する
こと

力ちから強ちよき演スベ説チ起オり卓テの自リ布ルにそよぐはつ夏なつのか
せ

戦たかひを好このむにあらずごん底そこゆ虐しつげられし聲こゑ我われ
を驅かる

大おほ比ひ叡え

杉すぎ木こ立た鶯うぐいすの聲こゑし水みづの響ひびしてわが靴くつあとの香かな
るかな

一山に鶯の聲す千年の老樹にわれの背をよす
るとき

見へ分かぬ石碑にさへ掌をあて、君と興がる
山の路かな

本朝の文化これより芽ぐみける土なり我の靴
にて踏むは

みはるかす湖のあなたに君ありと大比叡にた
ちて戀ひ渡るかな

鏡

餅

鏡餅

カール、マルクスの肖像に供へたり
春を迎ふる心

今ぞ渡らめ大河の流れわが前に響くが如き除
夜の鐘かな

鶏は高らかに鳴き年明けぬ雄々しの聲よ籠の
うちより

元朝げんてうや戀人こひびと健しななり金かねもなき名なもなき者ものの唯ただ一の歡よろこび

枕まくらもとに

自働車じどうしゃの響ひびすこの深夜しんやに

あゝ遊あそぶ者ものよ働はたらける者ものよ

「ゴルキイなほ生きてあり」

降りしきり降りしきる雪ゆきに

彼かれをこそ思おもへ

なにといふ勿體もつたいなさぞ

金かねを持たで

この大御代おほみよの春はるを迎むかふる

梅ほのかに香ひそめけり九州にわが労働者振
ひたつとき

ブルヂョアの

民の籠は賑へり

大正九年一月一日

ますく

おほいなる手なるかな
その手わが口に
どつしりと置かれたり大なるその手

恐しき疾の來り人はみなマスクをかけたたりけ
り、びつそりとなれり

世をあげてマスクをかけて密々と語るのみさ
ほど命惜しきか

革命は怖しきものか

ふどころに

鏢一文もなきひとのきく

恐慌は疾風の如し

そこ、に

温情主義の旗竿の折る

行く年ゆきとしや

熱茶あつちやの湯氣ゆけをふうと吹き

ふうと吹き目を閉しづるなりけり

人はみなあたりを去されり斯しかかるとさわれとわ

が手てを握にぎりしむるぞ

跋

西川君は『大阪毎日』の記者として時々わた
くしの所へ来る人である。普通の者でさへ、そ
の生活が日に益々「詩」の純眞を遠ざかつて、機
械か動物に近寄らうとのみする今の世に、新聞
記者のごとき劇務に従事しながら、常に心を詩
境に馳せて短歌の製作を怠らない事は、たしか
に感心なことだと思ふ。名前が「西川百子」と
書いてあると、男だか女だか分らないが、その作
品にも両性わかちがたい Hermaphrodite のやう

な所があつて面白い。ときどき宅へ来て、理屈
つばい氣焔をあげてゐるかと思ふと、また涙ぐ
ましい感傷的な事も言ふ。少しむづかしく云
へば、あしたにカアル・マルクスを讀んで、ゆふべ
に歌舞の巷に艶文の囁きを聴くとも云つた
様な風だ。君のさきの歌集『無産者』は奇禍に
遇うて、さながら美しい百合の花が盛りのなか
ばに風で吹き折られた様な悲しい運命を見た
が、今度のは幸に最後まで力一ぱい咲き誇るこ

とであらう。なに心配はいらない、最初から自
分で刀葉林と題して苦患の地獄を名乗つて出
てゐる。すべての文藝を人間苦の象徴化なり
と見る私の持論から言へば、此詩集もまた、此世
ながらの刀葉林の阿鼻叫喚の聲であらう。

大正十年十二月

厨川白村

ロマンチストであり、かねてまたリアリスト
でなくてはならない「新聞記者」を勤めてゐる
西川百子氏の歌には、如上の二つの色が鮮やか
に出て、そしてそれが仲よく手を組み合はさな
いで、互に口を尖がらし合つて、喧嘩腰であるの
がよく見える。「無産者」の反抗的で激越な歌
を作る一方では、そんな事は知らない顔で、京都

の美しい自然と冷たい婦人を嘆美する歌を咏むのであるのは夫で、氏はこの二つの異つた色の争ひを平氣で辛抱してゐるといふよりも、寧ろその争ひの痛みに啜り泣きをしてゐる觀がある。氏は「貧乏」にも親切で、しみじみとこの氣の毒者を勞つてゐるが、恩知らずでない「貧乏」は氏の爲にその悲しい腸をまざまざと開いてみせてゐる。氏はまた婦人にもかなり親切で、色々御機嫌取りをしてゐるらしいが、私の見た

ところでは、恩知らずな「婦人」は、貧乏ほど氏の爲めに心を見せてゐないやうな氣持ちがする。どうかすると寢返りを打つてゐるのではあるまいか、脊中合はせに坐つてゐるのではなからうかと思はれるやうな點が、その歌にちよいちよい見えてゐる。「刀葉林地獄」には秀れた歌が多い、この集は京都歌壇の代表作として、今の多くの歌集のなかに立ちて、ある特色を示してゐるものであるが、私は氏をしてこの境地に長

く踏み止まらしめない爲めに、氏が嘆美してや
まない京都の婦人が、馬のやうに氏を蹴飛ばし
て呉れるのを望むものである。詩人たる西川
氏は必ずや第二の「刀葉林地獄」に於て世間を
驚かすやうな作を見せて呉れるに相違ない。

大正十年初冬

薄田 淳介

——刀葉林地獄了——

大正十一年一月十五日印刷
大正十一年一月二十日發行



著者

發行者

印刷者

印刷所

西川白子

東京市京橋區橋町十五番地
株式會社 大鏡閣

代表者 西川白子

東京市京橋區木挽町二丁目十四番地
工藤正雄
東京市京橋區木挽町二丁目十四番地
中條印刷所

定價參圓貳拾錢

發行所

東京市京橋區橋町一五・大坂三休橋南
櫻井東京三三六二八・大坂二七一五五

株式會社 大鏡閣



白蓮夫人著 白蓮自選歌集

定價三圓二十錢
送料十二錢

白蓮夫人著 戲指鬘外道

定價三圓二十錢
送料十二錢

山田耕作・作曲 指鬘外道『歌の夢』
曲譜

定價二圓五十錢
送料十八錢

東京 橋本町 大 燈 閣 大 三 休 橋 南 阪

抱我如是地獄業化所作罪人見已欲
心熾盛刀葉樹頭次第復下彼人既下
彼人既下刀葉向上炎火熾焚利如剃
刀如是先割其肉次斷其筋次割其骨
次割其脈次割其髓遍體作瘡彼地獄
人如是被割如是被劈脈脈斷已彼婦
女欲愛燒心既如是看酸鳴鷲鳥即啄
其眼然刀葉先割其耳如是被割唱聲
吼喚刀葉灑焚次割其舌次割其鼻如
是遍割一切身分欲愛辜心如是到地
已而彼婦女復在樹頭彼人見已而復
上樹如前所說彼業力故如是無量百
千年歲如是無量百千億歲自心所誑
彼地獄中如是轉行彼地獄人如是被
燒向因故燒邪欲為因彼人如是猶不
捨欲無始來心如是轉行在於地獄餓
鬼畜生衆生之心不可調順在地獄中
猶故如是當知是心不可信也
正法